フィールド・オブ・ドリームズ: 米国のスポーツ映画

デービッド・Ｊ・ファイアスタイン

スポーツなら何でも歓迎という米国人のスポーツ好きを反映して、映画製作者たちは、ストーリーそのものよりずっと重要なメッセージを伝えるために、たびたびスポーツという題材に目を向ける。デービッド・Ｊ・ファイアスタインは、現在、米国務省アジア太平洋局に所属する外務担当官。これまで３冊の著作と約 130 本の記事を発表しているほか、国立モスクワ国際関係大学（MGIMO）、テキサス大学（オースティン）、ジョージ・メーソン大学（バージニア州フェアファックス）で教鞭を取ったことがある。

「マーシャルの奇跡」でコーチのひとりを演じるマシュー・フォックス。この映画は、アメリカン・フットボールの大学チームが、1970 年に選手およびコーチ 75 人を飛行機事故で失ったあと再建に取り組むという実話に基づいている。©AP Images/Rick Feld

米国ほどスポーツ――あるひとつのスポーツではなくスポーツ全般――が国民の生活に浸透している国はない。あったとしてもごくわずかだろう。スポーツは米国人の生活や会話や語彙の基本構造の一部であり、国の重要な指導者たちが国事について語るのに、例えば「マリアさま頼みのパスを投げる（アメフトで終了直前に運を天に任せてエンドゾーンへロングパスを投げる）」とか、「ダンクシュートで（確実に）得点する」とか、「硬式野球をする（強硬に振る舞う）」とか、「ベルトの下を打つ（反則を犯す）」といったように、スポーツの隠喩を借りるのが日常茶飯事になっているほどだ。さらには、米国の核爆弾発射に必要な暗号が入っている大統領の黒い小型の書類かばんは「フットボール」と呼ばれている。

米国人の生活に占めるスポーツの重要性は、現代の米国映画にたっぷり盛り込まれている。米国の映画会社はこの数十年間、米国映画史上最も刺激的かつ感動的で胸が躍るような忘れがたい映画の何本かを、スポーツを題材にしてつくり出すのに成功してきた。この伝統は20世紀前半に始まったが、今でも脈動し続けている。この数年間だけでも、アメリカン・フットボール、バスケットボール、野球、アイスホッケーから、ボクシング、競馬、サーフィンに至るまで、ハリウッドはほとんどすべてのメジャーなスポーツを映画に取り上げて、高い人気と評価を得ている。1970年代半ば以降、アカデミー賞を獲得した米国のスポーツ映画は全部で４作品ある。直近ではクリント・イーストウッドの女性ボクサーの話「ミリオンダラー・ベイビー」（2004）が、作品賞など４部門でオスカーを勝ち取った（最優秀作品賞を受賞したスポーツ映画は、ほかには２本しかない）。米国のスポーツ映画は、共通の手段を使って米国人の人生の豊かさや人間心理のあやを探求するが、米国人の重視する価値観についてはさまざまなことを教えてくれる。

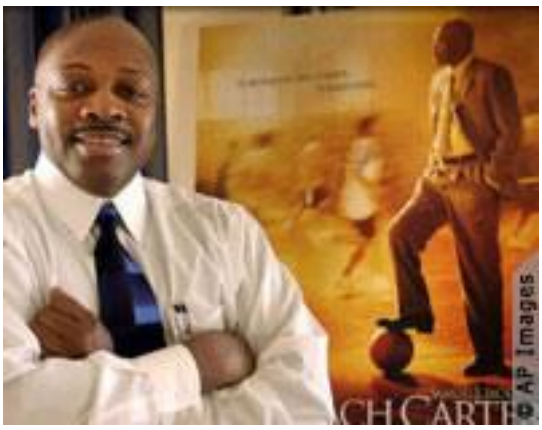
アメリカン・フットボールは、昔から米国スポーツ映画の重要なサブ・ジャンルであり、近ごろでは、野球を追い越して、最もよく映画の題材になるスポーツとなった。ここ数年間でも、質の高い本格的フットボール映画がたくさん公開されている。そこで追求されているテーマも、不幸を乗り超える（「マーシャルの奇跡」）2006年）、夢の実現に向けて奮闘する（「インヴィンシブル　栄光へのタッチダウン」2006年）、貪欲に優秀さを求める（「プライド　栄光への絆」2004年）、人種的・階層的分裂を癒し、共同体を築く（「タイタンズを忘れないで」2000年）、運動選手の生来の競争心と純粋さがプロスポーツ産業界の愚かな商業主義やシニシズムに打ち勝つ（「エニー・ギブン・サンデー」1999年）といったように、実にさまざまである。こうしたテーマの多様性もさることながら、これら最近の映画から浮かび上がってくるのは、フットボールに関するメッセージだ。つまり、壮大なスケールや度外れな華々しさ、肝の座った根性、そしてもちろん積極果敢な攻めの姿勢という点で、アメリカン・フットボールは米国人の生活そのものを最も完璧かつ鮮やかに象徴するスポーツだというメッセージである。

最近比較的少なくなってきたのがバスケットボールと野球の映画で、これらのスポーツは、観客動員力では 2 位と３位を占める。ここ数年間につくられたバスケットボール映画の２大ヒット作は、どちらも実話に基づき、人種的融和（「グローリー・ロード」2006年）や、チームワークと自尊心（「コーチ・カーター」2005年）というテーマを扱っている。米国バスケットボール映画のもうひとつの名作「フープ・ドリームズ」（1994年）は、スポーツ映画の分野では数少ないドキュメンタリー作品で、米国の大都市貧困層の生活と、夢の力（と現実の世界における限界）を鮮やかに描き出した。最近の２作品もそれぞれ、これと同じポイントを突いている。すなわち、肌の色や社会経済的出世の階段がどのよう

なものであろうと、より大きなチームとより高い目標に全力をささげれば偉業を成し遂げられるということだ。「フープ・ドリームズ」は、それにしてもそれは簡単にできることではないと忠告している。一方、この数年間につくられた米国野球映画の大作「オールド・ルーキー」（2002 年）は、やはり実話にヒントを得たものだが、どんなに可能性が低くても夢を追いかけるのに年を取りすぎているということはないのだと、いかにも米国的なやり方でわれわれに気づかせる。

ハリウッドが昔からボクシングに魅了されていることはすでに実証済みだ。最近のボクシング映画の３大作品といえば「ロッキー・ザ・ファイナル」（2006）、「シンデレラマン」（2005）、「ミリオンダラー・ベイビー」（2004）だが、すべて勝ち目のない挑戦の話、伝統的なアンダードッグ・ストーリーだ（もっとも「ミリオンダラー・ベイビー」はもっと複雑なほかのテーマも追求している）。米国のスポーツ映画製作者たちにとって永遠のお気に入りである勝ち目のない挑戦者の話は、オリンピックのアイスホッケー・チーム（「ミラクル」2004 年）や競馬場の馬（「シービスケット」2003 年）にまで及ぶ。これらの映画に登場する運動選手（「シービスケット」では競走馬）は、圧倒的に不利な状況にもかわらず驚くべき勝利を収めるのである。

全体として、これらの映画は米国人の価値観を雄弁に語っているが、外国の観客の感情にも訴える。それは、これらの作品が根本的にはスポーツ映画というより、マウンドに立ち、全力投球し、夢を生きるというわれわれのあこがれについて描いている映画だからである。



実話に基づいた映画「コーチ・カーター」（2005 年）のポスターの前でポーズをとる高校のバスケットボール・チーム監督ケン・カーター。映画の中ではサミュエル・L・ジャクソンがカーターを演じている。

©AP Images/Tony Gutierrez

スポーツと米国社会の関係についての詳しい情報は、2003 年のＥジャーナルＵＳＡ「米国のスポーツ」を参照。